

使っていた。「新京」と「長春」、「奉天」と「瀋陽」なども、これと似たような経緯があった。さらに広域について、たとえば「満洲」と「東三省」、「蒙疆」と「西北地方」、「北支」と「華北地方」、「中支」と「華中、華東地方」、「南支」と「華南地方」など、日中間では呼称が異なるだけではなく、それが指示する範囲にもずれがある。中国人である筆者の立場からすれば、これらについてすべて中国側の呼称を使用する進め方は考えられる。しかし、日本語で執筆した本書はまず日本人を讀者として想定している。中国側の固有名詞の多用で理解を妨げ、或いは固有名詞について説明するために文章を冗長にしようとは避けたい。その意味で本書では一部の用語についてあえて日本人が馴染みやすいものをそのまま使用することにした。

2 本書の構成

第1章では、日本の民俗学の確立過程と初期の活動を辿り、民俗学雑誌に掲載された中国関係記事を整理する。前者に関して、「一国民俗学」の論理の創出、木曜会の形成とその意味、民間伝承の会と『民間伝承』に現れる組織の特色、山村・海村調査と語彙集の編集にみる民俗学研究法の特徴などを中心に論じる。後者に関して、主として『旅と伝説』と『民間伝承』を材料に、日本民俗学における「中国の不在」を論じ、それが一九三九年を境にして大きく変化したことを指摘する。

第2章では、民俗学者太田陸郎（一八九六～一九四二年）を取り上げる。太田はまず兵庫県下で郷土史の解明に努め、一九三〇年代半ばから日本民俗学の体系化に積極的に参与し、重要な役割を果たした。一九三八年夏、彼は軍人として中国に赴き、その後軍務の傍ら、揚子江中流域の民俗学的研究を行ったが、一九四二年シンガポールからの帰国途中、飛行機の事故で亡くなった。

本章では太田の日本及び揚子江流域での活動を辿り、彼が日本研究の延長線上に中国研究を位置づけ、そこに強

い文化的関心が見られると指摘する。さらに国内学界との密接な交流を通して、日本の民俗学が中国を対象とすることが可能であるというイメージを日本民俗学界に与えた存在として、太田の役割が大きいと指摘する。

第3章では、民俗学者大間知篤三(一九〇〇―一九七〇年)を取り上げる。大間知は東京帝国大学新人会の成員であったが、柳田門下の木曜会の初期成員となり、日本民俗学の組織化に貢献する。一九三九年二月から建国大学に赴き、精力的な調査研究活動を展開した。戦後日本に戻り、民俗学研究所、『民間伝承』の活動に積極的に参加し、社会的な手法によって家族・婚姻制度の研究において業績をあげた。

本章は主として大間知の日本及び中国東北地方での活動を追跡し、多民族的环境のもとで、彼は理論的に民俗学が民族学に含まれるべきだという認識を獲得したことを明らかにし、そして満洲族、ダウール族を中心とした民族調査研究を検討することによってそこに見られる強い政治的傾向を指摘する。

第4章では、太田や大間知と比べて若い世代の民俗学者直江広治(一九一七―一九九四年)を取り上げる。直江広治は東京文理科大学東洋史科在学中から、木曜会に顔を出す。一九四一年日本人学校の教師として北京に赴任し、後、講師としてカトリック系の北京輔仁大学に籍をおく。戦後帰国し、民俗学研究所の運営に携わり東京教育大学、筑波大学の教育活動で民俗学のアカデミック化に深く関わり、比較民俗学を提唱する。

本章は、彼の日本及び北京を中心とした調査、教育活動などを整理し、彼には最初から中国と民俗学という二つの関心があったことを指摘し、そして北京時代において彼は中国の理解に努め、中国における日本民俗学の普及のために積極的に活動したことを描き出す。

個々の研究者に即した議論を踏まえて、第5章では日本民俗学の組織的な活動として「柳田国男先生古稀記念会」を取り上げる。当記念会は柳田国男の古稀を記念すべく一九四三年秋から準備が進められ、一九四四年一月から、①九地方協議会地区を単位とした民俗学地方大会の開催、②北京、新京、台北、京城、張家口等における国外民俗学大会の開催、③国外を含む民俗学内外の学者や有名人士による記念論文集の刊行、④雑誌『民間伝承』での

特集号一年間連続発行、などの内容が予定されていたが、敗戦で一部しか実行できなかった。

本章では発案から中止までの経緯を明らかにし、当事業を、戦時下において国外で活躍した民俗学者の活動やその人脈、そして国内における木曜会有力メンバーの推進と指導者柳田の積極性の増大などを背景に、民俗学の東アジア規模の統合と再編成を意識したものであると位置づけ、この構想の組織面及び理論面の特色を検討する。

終章では、これまでの検討を通して戦時下の日本民俗学と中国との関わり方の特徴を総括し、初期の日本民俗学にとってこの関わりは如何なる意味を持っていたのかを考察する。そして戦後の日本民俗学にもふれ、学史の回顧によって如何なる示唆が得られるのかを考えてみる。